加々美論文に対するコメント

愛知大学経済学部 佐藤元彦

オリエンタリズムの再生産、オリエンタリズムの認識構造だけでなく存在構造もが強力 に復活してきていることに対抗する「態度」としてのコビヘイビオリズムの提唱は、大変 に魅力的である。ただし、コビヘイビオリズムを確立するために、(オリエンタリズムが影 を落とした従来の)地域研究に代わって国別学が提唱されている点については、疑問がな いわけではない。

加々美氏は、国別学の前提として、研究対象となる各「国」のさまざまな諸主体、具体的には「国家」・・・・などが主体性をもつこと、そして、それは、外国人でもある「国別学」研究者の主体性と同格なものとして存在すること、をまず初めに提起している。そして、第二には、諸主体間の相互連動性、「共同主観的存在構造」を掲げている。最後の三つ目として、外国人研究者は、相互協調的、相互癒着的、あるいは相互対立的な働きをし得る輻輳した「共同主観性」の中に分け入って、オリエンタリズムの認識構造・存在構造を明らかにし、その状況の中から課題を見つけてその解決を目指すことが求められている。

だが、近代主義の克服を目指すのであれば、「態度」としてのコビヘイビオリズムが必要であるのみならず、特に近代の社会科学が前提としてきた「国」、「国家」あるいは nation の境界性を問い直すという営みが必要ではないであろうか。この点は、いわゆるグローバル化の進展によって近代国家の境界性が実質的、機能的に薄められているということを言おうとしているものではない。近代における境界が、多くの場合、山や河、また海といった自然資産を利用して設定されてきたことに関わるものである。山、河、海が境界によって分割され、それらをまるごと保全、管理することを怠ってきたことが、今日の人間生活を危うくしていると言っても過言ではない。最たる例は、領海、経済専管水域による海の分断であろう。このように考えると、オリエンタリズムに代表される近代主義を克服するために、境界性の克服、さらには「越境学」の確立を追求することも必要であろう。

もっとも、論文では明記されていないものの、「共同主観性」が越境性への視点を含んだものであると考えられないわけではない。それは、あくまでも国別学として提起されており、一国学としては考えられていないという点から推量できる。ただし、この推量が妥当であるとすれば、そうした点への言及は必要と考える。例えば、インド学とインドネシア学をどう結びつけるのかといった点について、詳細な解説が望まれる。

多言するまでもなく、境界性の克服、あるいは「越境学」の確立は、境界そのものを否定するということではない。なぜなら、およそすべての社会は、何らかの境界なしには成立しないと考えられるからである。ガバナンス、マネジメントということを考えれば、むしろ境界は必要であろう。地球という社会だけでは、人間生活は成立しないとも言える。

そうだとすると、おそらく問題なのは、どのような性格の境界なのであるのか、という点であろう。ストックを重視するという観点からは閉鎖的な境界が必要となろうが(近代の境界はまさにこのような性格をもつものであった)、そうしたことが様々な問題を今日引き起こしているとするならば、フローを促すような開放的な境界が考えられる必要がある。先にあげた、例えばインド学とインドネシア学の関係のあり方についての説明も、この点に踏み込むことが望まれる。さらに言えば、オリエンタリズムの再生産を通じて展開されている画一性、標準化、一方的などを特徴とする今日のグローバル化に代わる、多様性を基礎としたオールタナティブなグローバル化なるものが想定できるとすれば、それは、国別学が境界性をどのように克服しているのかに係っているといっても過言ではない。

グローバル化に対応した近年の地域研究の変化(特に日本における)は、地域の「たこつぼ」的研究から、地域間の比較や相関の研究へという形で生起しているという(例えば、油井大三郎「日本における地域研究の現状と課題」『アジア経済』2007 年 9 月号、58~68ページを参照)。だが、そうした比較や相関の研究は、グローバル化の前に方法論的基礎を雲散しつつあることを示しているように見受けられる。端的には、地域研究がグローバル・スタディーズに飲み込まれつつあるとも言い換えられるだろう。このことは、これまでの地域研究がオリエンタリズムに彩られてきたことの反映であり、地域研究の地域研究たる所以が深く考えてこられなかった結果であろう。その意味で、コビヘイビオリズムの提唱は、国別学としての地域研究の再定置につながる試みと評価できる。ただし、度々述べてきたように、境界性の克服との関連性を明らかにしていただく必要性があると考える。